

Title	病いの災因論から健康の福因論へ：スピリチュアリティからみる民俗的健康観
Sub Title	From a cause of disease to a cause of health : a study of folk health in spirituality
Author	藤野, 陽平(Fujino, Yohei)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.93- 104
JaLC DOI	
Abstract	Being the terminology of mind-and-body dualism, "Health" is understood as "having no illness". WHO has proposed a wider definition for health, which is, "Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity". And since the concept of health was spread all over the world in the meaning of antonym of sickness, social anthropology has given a main place to sicknesses, "not to health." However, before the concept of health comes into a local society, there must have been synonyms for it. So in this study I use "ping-an" (平安) ("peace", in Chinese and Taiwanese) as the keyword. As the example of this study, I use some discourses of members in True Jesus Church in Taiwan. This church is the proper case for this study since it was established in continental China and grew in Taiwan after the WWII. Now they exist 224 churches and 45496 members in Taiwan. This is one of the biggest Churches in Taiwan. As a result I focus on the aspect of ping-an which they accept, and describe how they use it for spiritual health.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

病いの災因論から健康の福因論へ

—スピリチュアリティからみる民俗的健康観—

From a Cause of Disease to a Cause of Health

—A Study of Folk Health in Spirituality—

藤 野 陽 平*

Yohei Fujino

Being the terminology of mind-and-body dualism, "Health" is understood as "having no illness". WHO has proposed a wider definition for health, which is, "Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity." And since the concept of health was spread all over the world in the meaning of antonym of sickness, social anthropology has given a main place to "sicknesses," not to "health." However, before the concept of health comes into a local society, there must have been synonyms for it. So in this study I use "ping-an" (平安) ("peace" in Chinese and Taiwanese) as the keyword. As the example of this study, I use some discourses of members in True Jesus Church in Taiwan. This church is the proper case for this study since it was established in continental China and grew in Taiwan after the WWII. Now they exist 224 churches and 45,496 members in Taiwan. This is one of the biggest Church in Taiwan. As a result I focus on the aspect of ping-an which they accept, and describe how they use it for spiritual health.

1. はじめに

本研究の目的は医療人類学の分野で、災因論に比べて取り上げられることが少ない福因論に注目して、民俗的健康観の一局面をスピリチュアリティの視点から考察することにある。災因論とは「病気や不幸に際して、それを説明する文化システムであり、祖先の祟りや隣人のウィッチクラフトによるという『解釈』や『説明』が試みられるもの」、福因論とは「特定の個人だけがなぜ社会や経済の変動の中で成功して裕福になったのか、なぜ幸福がもたらされるかを考えるもの」としておく。福因論もウィッチクラフトによるという「解釈」が多い。

災因論に関する研究は、医療人類学の主要な研究テーマであり、多くの研究・報告がなされてきた。主な主張としては、熱い食物と冷たい食物のバランスが崩れると病気になる【Kleinman, 1980: 7, 111; 波平, 1994; 吉田, 1983; 池田, 2001: 245 等】、神々や霊が原因となる【Kleinman, 1980: 106; 吉田, 1983; 長島, 1983 等】、邪術あるいは黒呪術 (black magic) の影響を受ける【吉田, 1983; 長島, 1983 等】、双子の異常性による【長島, 1983】、食物摂取の不均衡に基づく【池田, 2001: 245】、異常行動に

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (文化人類学)

よる【池田, 2001: 245】、魂の喪失が原因である【Kleinman, 1980: 243】等があげられるであろう。

しかし、社会や文化によって異なる災いの原因とその結果を単純に紹介する災因論に関しては批判もなされている。例えば渡辺公三は「病いの原因を語るよりも病いとは語りうるものとされることによって初めてわれわれの経験の内部に統合されうるものとなる」【渡辺公三, 1983】とし、災因を事細かに調べるよりも、病いがいかに語られるかということの研究対象とすべきであると指摘する。また、池田光穂は「病因論の概念のシステムを検討しても、個々のケースにおける病人とその家族のリアリティは見えてこない」【池田, 2001: 112】としている。つまり、現在の人類学者の多くは、単純な民俗的因果関係のシステムを紹介することに向かう災因論よりも、病人の語りの細部や治療過程、またそこから立ち現れる病いの意味の研究に向かう災因論を重要と考えているようである。確かに社会や文化によって異なる幾多の災因の網羅を目指し、フィールドで見聞した「新種の」災因を紹介することには意味があるとしてもそれだけにとどまってはならないであろう。

本研究は病いや災いを研究対象とするだけでなく、健康を積極的に取り上げることによって新たな視点を提出することを目指す。そもそも生物医学的な意味での「健康」とは、デカルトの心身二元論に基礎を置き、機械論的身体観にもとづくため「病いのない状態」と考えられている。つまり、身体に異常がない状態であり、どこかに異常があればその場所を治療すればよいということになる。ゆえに生物医学では身体の部位の治療に重点が置かれることになっていく。精神と身体を切り離し身体の異常のみに注目する生物医学は確かに大きな発展を遂げたが、身体の異常のみを病いとみて病人を見ないという状況に陥ってしまう【山口, 1990】。また、近代化の過程で生物医学はそれ以外の医療活動・医療知識を「野蛮」「未開」なものとして排除しつづけてきた【Porter, 1987】。

現代社会では身体のみの特化した健康観は再検討が求められているといえる。健康についての定義として影響が大きいのは 1946 年に世界保健機構 (WHO) が採択した世界保健憲章の定義で「肉体的・精神的・社会的に良好な状態をいい、ただ単に病気や虚弱がないということではない」とされている。さらに 1998 年 1 月の第 101 回執行理事会以来この定義に「ダイナミック」と「スピリチュアル」の語を入れようという議論が起きている【葛西, 2003】。一方、このような健康観の拡大に対しては、社会学や人類学からは概念が拡大しただけであり、ユートピア的な健康の追求によって、結果としては皮肉にも健康が手に入らないものとなってしまっているという批判がなされている【Dubos, 1959; 野村, 2000】。しかし、人類学の観点から考えると、健康を「病いがいい」と一律に考えないで、健康の社会的文化的に異なる多元的多声の側面に注目すべきであろう。実際にたとえ WHO 定義にスピリチュアルの語が入れられたとしても、現実社会に暮らす生活者のリアリティを無視して世界中に一律にその概念を押し広げるようなことをするのであれば、それは「上から」の一方的な押し付けであって生活者のリアリティに即した概念として定着することにはならないであろう。

そこで本研究は台湾のキリスト教を取り上げて健康の原因としての福因論を探っていくことで、生活者のリアリティに接近した健康観の一局面を提示したい。また健康とは静態的に「病いがいい状態」ととらえるのではなく、社会的に構築される動態としてとらえるべきと考える。この視点は宗教研究が現代的状況をとらえるために従来の教義・教団・信者という宗教の定義にとらわれない個人の心的、スピリチュアルな側面へ視線を向け始めている傾向性【大谷, 2004】に影響を受けている。

以上の問題意識に照らして重要な視点が健康のスピリチュアルな側面である。事例として取り上げる台湾のペンテコステ系キリスト教会である真耶穌教会では信者らの癒しの言説の中には様々なスピリ

チュアルな健康観というべきものを見出すことができると考える。なお、スピリチュアリティの定義に関して榎尾直樹は「自分の中や自分と他者との間で働いていると感じられる、自分を越えた何かとつながっている感覚(の質)」【榎尾, 2004: 273】とし、窪寺俊之は「スピリチュアリティとは人生の危機に直面して生きる拠り所が揺れ動き、あるいは見失われてしまったとき、その危機状況で生きる力や、希望を見つけ出そうとして、自分の外の大きなものに新たな拠り所を求める機能のことであり、また、危機の中で失われた生きる意味や目的を自己の内面に新たに見つけ出そうとする機能のことである」【窪寺, 2005: 13】としている。そこで本研究では「危機的状況を契機としてその人が感じ取る自己を超えた何者かにつながっていることで生じる感覚やその感覚が原因で生じたと考えられている現象」としておく、つながるべき対象は自然でも、超自然でも、経験的にでも、感覚的にでもかまわない。とにかく超越的に(なにか不思議な縁とでもいうようなものが介在して)何かとつながっているという感覚であって、対象や方法は限定しないしておく。

キリスト教における聖霊観念について概略しておく。聖霊とは父なる神、子なるキリストともに第三の神位である。旧約時代にはアブラハム、ダビデ、預言者等の特定の個人が聖霊と接することができたのだが、イエスの死と復活、昇天後のペンテコステ(五旬節)にまず弟子たちに聖霊が降り、それよりイエスを救い主と認めるものならば誰にでも聖霊が降りるようになった。聖霊が降った信者にはさまざまな奇蹟を行う力が与えられるとされ、本研究の関連で注目すべきは病いを癒す力があげられる。ここで指摘しておかなくてはならないのはキリスト教における聖霊観念は主に神と人とのつながりを念頭において設定された概念であって人間と人間のつながりという視点は希薄であるということである。

以上の理由からキリスト教におけるスピリチュアリティは聖霊や悪霊にみられる霊(スピリット)のことであるととらえず、分析概念として扱うこととする。スピリチュアリティとスピリットは重なる部分は多いが分けて考える必要がある。実際に英文の聖書“New American Standard Bible”では’spirit’は出てくるが’spirituality’の語は登場しないのである。むしろ現代社会においてスピリチュアリティという語が使われるときはキリスト教の伝統よりも1960年代後半から起きてきたニューエイジ運動の影響が強い¹⁾。そこで本研究ではキリスト教的スピリットとニューエイジ的スピリチュアリティの相互作用を考慮に入れながら考察することとする。

2. 台湾のキリスト教研究と真耶穌教会

1. 台湾のキリスト教概要

本研究で事例として扱う台湾のキリスト教と真耶穌教会の現状を簡単に紹介する。台湾のキリスト教信者は2000年末現在で天主教が178,325名、基督教²⁾が390,019名で合計が568,344名と道教の806,872名に次ぎ、仏教の196,704名を上回り、寺廟教堂数も道教が7,415カ所、仏教が1,704カ所に対して天主教が707カ所、基督教が2,254カ所で両者を合わせると2,961カ所となりキリスト教は道教に次いで第二位の勢力を誇っている【台湾研究所, 2001】。キリスト教内を概観すれば、戦前から宣教してきた天主教(教会数774, 会員数301,352名)や台湾基督長老教会(教会数1,218, 会員数217,280名)、中国・台湾にルーツを持つ召会(教会数702, 会員数98,108名)、独立教会(教会数598, 会員数87,328名)が有力な教会であって、本研究で取り上げる真耶穌教会はそれらにつづく勢力である【義工等編, 2004: 6-9】³⁾。

2. 真耶穌教会の歴史

真耶穌教会は20世紀初めにアメリカから発生したペンテコステ運動の影響下、北京で1917年に耶穌真教会としてスタートした。当初は耶穌教会や更正耶穌教会、耶穌新教会、耶穌真教会など様々な名称を用いていたが、1917年に天津で行われる集会のための白旗に「耶穌真教会」を王被得が「真耶穌教会」と書き損じてしまった。それを見た魏保羅は「これは主の聖意である【日本真耶穌教会本部編、1943: 10】」として、このときから「真耶穌教会」という名称に確定した。

台湾へは1926年3月3日に真耶穌教会が伝えられ、その後40日の伝道で3カ所の教会と3家族100人の信者を獲得した。その後も順調に宣教したのだが戦争の波に巻き込まれて、宣教も制限され、この時期はほとんど成長していない。戦後になって順調に宣教活動が進み、1995年の状況では教会数224箇所、信者数約45,496名、伝道者112名である。台湾の基督教信者が390,019名で、2000年現在登録されている教会が55団体である【台湾研究所編集、2001】ので全体の10分の1以上という信者を獲得している⁴⁾。

3. 言説分析

ここで紹介するのは筆者が採集した真耶穌教会における奇跡体験に関するインタビューの内容である。真耶穌教会の教義は聖書主義に則っているのだが⁵⁾、聖書に根拠が見出せれば俄かに信じがたいような出来事であっても神の力が現れた奇跡として現実社会でも実現すると考える。そのために奇跡の証言が多くなされ、信者・未信者ともに大きな影響を与えている。本項では事例として数名の信者が語った言説の内容を分析して彼らの健康の原因としての福因を分析する⁶⁾。

1. A氏 台南市女性

「2001年5月5日土曜日午後7時30分頃、私は自転車に乗って教会の詩班に参加しようとしていました。しかし、家から200メートルほどの十字路でオートバイに腰を轢かれてしまい、私とその相手の方は田んぼに落ちてしまいました。そのときに強烈に轢かれてしまったので、私は昏迷に陥ってしまいました。神に感謝します。その相手の方の怪我は大したことはなく、すぐに助けられました。しかし、私の状況は相当危険で、両親が事情を知って急いで病院に駆けつけたとき、私の初歩検査の結果を見て、医者は樂觀できず、再検査の結果を見る必要があるといました。

私の両親はすぐに教会の兄弟姉妹に代祷をお願いしました。観察期が過ぎて、医者は手術をしてもいかと両親に尋ねました。両親は手術の難度を質問しました。医者が言うには「手術をしても良くなるとは限らない、しかし、手術をしないと良くなることはない。」と言うことでした。そのような状況で、私の両親は手術をしないで心をこめて神に頼ると決心しました。それから、七日間入院して、私は医者に退院希望を出しました。しかし、私には激しい脳振動から耳が損傷していたので、必ず入院して検査を受けなくてはなりませんでした。しかし、私は病院ではよく眠れず、脳振動の関係で情緒も不安定で、身体は相当虚弱していました。そこで私は家に帰れるように強い希望を出したのです。

このような時、教会の兄弟姉妹は私のために断食をして祈ってくれました。私のために涙を流して祈ってくださったのです。また、多くの先輩や私を愛してくださっている方々がお見舞いにきてくださいました。主イエスの愛によって快方に向かい、教会の兄弟姉妹の代祷のおかげでどンドン元気になり、多くの人の助けによって健康を取り戻しました。

事故現場に戻ってみて、初めて当時の危険を実感しました。あともう少しでセメントでできた水溝に

ぶつかっていたのです。もしかしたらこんなに幸運なことにはなかったかもしれません。病院に送られている途中で、神の守りによって、教会の兄弟姉妹の祈りによって、私は生きることができました。医者でさえも奇妙であると言っています。これはまさに神の奇跡です。病院に着いた当初はほとんど死にかけの人間であって、このように虚弱で、生存確率はほとんどゼロでした。しかし、神のおかげで、愛のおかげで、多くの方々の愛のおかげで、私は生かされました。すべてを神に感謝します。神は人類生命の主宰で、もし神のおかげでないならば、私は今のように健康に暮らしてはいなかったでしょう。」

以上は真耶穌教会に通う女子大生の言説であるが、バイクとの交通事故に巻き込まれることで生命の危機を体験する。生物医学的には手術の必要があったにもかかわらず手術はせず、真耶穌教会に通いイエスに祈ることによって危機を回避した。その際、神の力や知人の祈りによって健康を回復したと考えている。実際彼女はとて「手術をしないと良くなることはない」と言われるほどの交通事故を体験したとは思えないほど元気に暮らしている。

2. B氏 台東地区男性

母は以前芋の農家で苦しい生活をしていました。芋は6棟植えていました。ある日の夕方天気が悪くなりそうな時、母と父は畑で働いていました。その頃雷が鳴っていて、すぐに雨が降りだしそうでした。牛は歩くのが遅いので母は父に牛を引いて先に帰らせ、自分は草取りを終えてから帰ることにしました。父が畑を100mほど離れた時に、母のいる畑に雷が落ちました。その時母はおもわず「ハレルヤ」と叫んだのです。その時母は30cmほど飛び上がり、地面に降りたとき何となく家に帰りました。次の日畑に戻ると6棟の芋がすべて燃えていました。しかし母は雷に打たれず、「平安」のままでした。雷は高いところに落ちますが、母にはなく芋に落ちました。信仰があればイエスが守るのでしょう。

弟は妊娠6カ月で生まれてしまいました。医者は助からないと言いました。六日間乳を飲まないし、生まれたときに泣くこともありません。乳を飲まないので砂糖水を飲ませていましたが、吐き出してしまったり、下痢をしてしまったりで、すぐに出してしまいます。息も弱かったのです。そしてついに母親も疲れから精神病になってしまいました。そこで教会中で彼のために祈りました。しかし、あまりよくならなかったため、母は集会で信者たちと一緒にイエスに「息子が助かるならば助けてほしい、しかし、助からないならば天国に連れて下さい」と祈ったのです。その時急に弟は泣き出しました。それまでは小さい息でかすめるような声で泣いていたのですが、このときから大声で泣くようになりました。母は生きる見込みがあると感じ乳を与えたところ、飲み出しました。その後2,3回祈ったところ顔色もよくなり、食事もできるようになり、イエスは間違いなく助けてくれたのだと確信しました。その弟は今45歳で1男、3女に恵まれ元気で「平安」が守られています。その後母の精神病も祈りで癒されました。だから母は「あなたはイエスに助けられたのだから、イエスに恩返ししなくてはならない」という弟に言い続けています。

末の弟が子供の頃、飼っていたひよこが死んでしまいました。その頃、肉は高級品でたとえひよこでも貴重で一家にとっては重大なことでした。そのころ弟はイエスの名によって祈るならば死者も生き返ると聖書に書いてあるのを教えてもらったばかりで、兄弟全員を集めてひよこのために祈ったところ、ひよこは生き返りました。

人間にとって「平安」は一番必要なものです。「平安」は神から来るのです。真の信仰が「平安」の素です。一般の人が欲しがるのは人の手で作ったものです。真の「平安」は体験する必要があるものです。どの神も「平安」といいますが真の「平安」は真の神から来るのです。人を殺すような宗教の「平安」

はおかしいでしょう。イザヤ書にはイエスのことを預言して「『平安』の王」と言っています。またイエスが伝道しているときに多くの病人を治しました。彼らはイエスを信じたらずぐに治ってしまいました。私の一家の証はイエスによって「平安」になったということです。一家にはもともと「平安」ではありませんでしたが、信じてから「平安」になりました。民間信仰を信じていた頃に比べて、イエスを信じるようになってから生活が良くなりました。というのは健康ならば商売ができるのです。不健康では薬や医者にかかります。真耶穌教会に来てからそれまでの問題は解決し、病気が治り、生活が良くなりました⁷⁾。

語り手の家族に対して何度となく訪れる危機を真耶穌教会への信仰によって乗り越えてきたという証言である。芋農家であった母親が落雷から身を守ったことや未熟児であった弟が母親と教会の祈りによって生命力を得ていく過程、末の弟が飼っていたひよこが祈りによって生き返ったことが述べられる。その結果、B氏は真耶穌教会への信仰によって「平安」となったと結論づけている。

3. C氏 男性

4年前、右のあごの後ろに瘤が見つかりました。良性のものであったのですが、T大学病院に入院し、口から手術を行いました。また、背中の脂肪にも2カ所瘤ができたのですがここは手術はしませんでした。局部麻酔をしたのですが麻酔に敏感な体質で手術中に心臓が停止してしまいました。この時神様が助けてくれなかったら今頃死んでしまったでしょう。この手術後、反対側のあごにも瘤ができてしまいました。難しい手術で台南の医者では手術ができないということなので、台北の病院まで行きました。このようなときにマルコによる福音書11章23-24節の個所を読みました。

「よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わぬで信じるなら、そのとおりに成るであろう。そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう⁸⁾。」

そして、祈りによって治し、手術をしないことにしたのです。そしてその晩に白い鷲が飛んできて翼であごの瘤をなでる夢を見ました。

朝起きてみるとしこりはなくなり、柔らかくなっていました。医者の診断では「もう手術は必要ないので、退院してもよい」ということでした。祈る前に読んだこの個所を完全に信じ、一切疑いませんでした。強い信仰心によって救われたのだと思います。

それ以来このことをタイ・マレーシア・シンガポール等世界中の各地で証しするようになりました。ある時に証しをするためにタイに行きました。この時に同行した人が運転をしていたのですが、タイと台湾は交通事情が異なり運転に慣れずに事故を起こしてしまいました。しかし、私は事故の瞬間に「ハレルヤ」と叫んだのです。この時に胸のポケットに入れてあった眼鏡がごまごまになったが、そのおかげで体は無事でした。しかし、私以外の人は大怪我をしていました。警察が来て調べてみると、私が全く怪我をしていないのを不思議に思い、念のために内傷がないか病院に連れて行きました。しかし、私は神様を信じていたので内傷もないことを確信し、安心していました。

その晩は現地の信者たちが心配して祈ってくださいました。また夢にも鷲が現れ体中をなでていきました。この鷲は実は天使であったのです。実際に私には全く怪我はなく、一つの内出血も見つかりませ

んでした。

この言説は直接筆者に対して語ったものではなく見証会と言われる奇跡体験の証言を中心とする礼拝中に話者が証言したものである。このように礼拝中に聴衆に向かって公然とドラマティックに語られる証言は当然教会側の指導、校正等があるものと考えらるべきであるが、それが聴衆に与える影響は非常に大きく無視できないものである。証言をする男性は壇上で瘤という病いを近代医学ではなく信仰心によって克服し、さらに交通事故という危機に対しても「ハレルヤ」と叫ぶことで無事であったというドラマティックな体験を熱っぽく証言する。途中聖書を引用して自らの体験の正当性を強調し結果的に驚の姿で夢に現れる天使として現れる神の力を解き明かす形となっている。実際に真耶穌教会では多くの病いが癒されるという証言がなされており、本人もしくは家族・知人に重大な病いがある場合にはこのような体験談が持つ影響は計り知れないものであろう。

4. 分 析

1. 福因の言説

それでは前項の言説中に見出される福因を抜き出してみたいと思う。まず、A氏であるが特徴的なものとして「神もしくはイエスの名」、「祈り」、「愛」がある。まず、「神もしくはイエスの名」⁹⁾を抜き出すと以下のものであろう。「心をこめて神に頼る」、「主イエスの愛によって快方に向かい」、「神の守りによって」、「神のおかげで」、「もし神のおかげでなければ、私は今のように健康に暮らしてはいなかったでしょう」。「祈り」は「私の両親はすぐに教会の兄弟姉妹に代祷をお願いしました」、「教会の兄弟姉妹は私のために断食をして祈ってくれました」、「私のために涙を流して祈ってくださったのです」、「教会の兄弟姉妹の祈りによって」。「愛」は「多くの先輩や私を愛してくださっている方々が」、「愛のおかげで、多くの方々の愛のおかげで、私は生かされました」。

B氏は「神もしくはイエスの名」、「祈り」、「ハレルヤと叫ぶ」、「信仰」の順で紹介する。「神もしくはイエスの名」は「信仰があればイエスが守る」、「イエスは間違いなく助けてくれた」、「イエスの名によって祈るならば」、「イエスによって「平安」になった」となる。「祈り」は「教会中で彼のために祈りました」、「母は集会で信者たちと一緒にイエスに「息子が助かるならば助けてほしい、しかし、助からないならば天国に入れて下さい」と祈った」、「その後2,3回祈ったところ」、「母の精神病も祈りで癒されました」、「イエスの名によって祈るならば」、「兄弟全員を集めてひよこのために祈った」となる。「ハレルヤと叫ぶ」は「母はおもわず『ハレルヤ』と叫んだ」で、「信仰」は「信仰があればイエスが守る」、「真の信仰が「平安」の素」となる。

C氏は「神もしくはイエスの名」、「祈り」、「信仰」、「『ハレルヤ』と叫ぶ」の順で紹介する。「神もしくはイエスの名」は「神様が助けてくれなかったら」、「その晩に白い驚が飛んできて翼であごの瘤をなでる夢を見ました¹⁰⁾」、「夢にも驚が現れ体中をなでていきました。この驚は実は天使であったのです」である。「祈り」は「祈りによって治し、手術をしない」、「現地の信者たちが心配して祈ってくださいました」で、「信仰」は、「祈る前に読んだこの箇所を完全に信じ、一切疑いませんでした。強い信仰心によって救われた」、「『ハレルヤ』と叫ぶ」は「事故の瞬間に『ハレルヤ』と叫んだ」となる。

以上のように真耶穌教会における福因には「神もしくはイエスの名」、「祈り」、「信仰」、「『ハレルヤ』と叫ぶ」、「愛」等の特徴があるようである。前三者は一般的に聖書の中に癒しの効果があると記されている¹¹⁾。しかし、「愛」と「『ハレルヤ』と叫ぶこと」に関しては一般的に癒しの効果があると書かれている

箇所はない。それでも神を愛することは信仰と同義と解釈することも可能であろう。また『「ハレルヤ」と叫ぶこと』には真耶穌教会の祈りの方式に関係があると思われる。真耶穌教会では祈りの際に跪き、最初に「奉主耶穌聖名祷告ホン・ジュイエス・シェンミン・ダオガオ（主イエスキリストの御名によって祈ります）」と言い、「哈利路亞ハレルヤ」「讚美主耶穌ザンメイ・ジュイエス（主イエスを賛美します）」と繰り返す。そのうちに手が震えだし、舌がもつれて霊言という意味不明の言葉で祈り出す（写真1）。この状況になると聖霊が信者に降っていると考えられている。その言葉も一般的なキリスト教会のように自分で祈りの言葉を考える必要はなく、むしろそのような祈りは人間の思いがでしてしまうので、聖霊に導かれるままに意味不明の言葉で祈ることが求められる。しかし、真耶穌教会に行けば誰でもすぐにこの祈りができるわけではなく

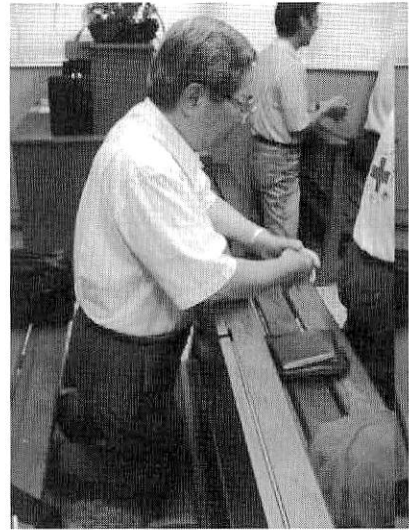


写真1 祈禱

く聖霊を受けたもの、つまり主イエスとともにあるものだけにこの霊を用いた祈りが可能であるとされている。つまり、この祈りには信仰と聖霊が必要であって、形だけの真似事では行うことができないという。そしてこのような祈りには上述のように奇跡を行う力があると考えられているのである。先の条件から考えれば真耶穌教会の祈りには「神もしくはイエスの名」、「信仰」といった要素も組み込まれており、最も複合的総合的実践的な福因であると言うことができよう。そのようなリアリティを持っている信者らが不意をついて襲う危機の際にとっさに「ハレルヤ」と叫び、その後危機が回避された際にその実践に超自然的な力があるとみなされていることは自然なことであろう。

2. 信者同士のつながりの中で

次に危機の回避に影響したのは誰であるのかということについて考察してみたい。まず言説中に登場する人物を抜き出してみると A 氏には「私」、「相手の方」、「両親」、「医者」、「教会の兄弟姉妹」、「多くの先輩（人・方々）」、「私を愛してくださっている方々」、B 氏には「母」、「父」、「弟」、「医者」、「教会中」、「信者たち」、「末の弟」、「兄弟全員」、C 氏には「同行した人」、「私以外の人」、「警察」、「現地の信者」となるが、その中で「私」以外の上記の登場人物で危機の回避に影響した者は A 氏の言説では「両親」、「教会の兄弟姉妹」、「多くの先輩（人・方々）」、「私を愛してくださっている方々」、B 氏では「母」、「弟」、「教会中」、「信者たち」、「末の弟」、「兄弟全員」、C 氏では「現地の信者」となり、関与していないものは A 氏では「相手の方」、「医者」B 氏では「父」、「医者」C 氏には「同行した人」、「私以外の人」、「警察」となるであろう。前者に含まれる A 氏の「多くの先輩（人・方々）」、「私を愛してくださっている方々」と B 氏の「父」、C 氏の「同行した人」という例外¹²⁾はあるが両者の間には明らかに真耶穌教会の信者とそうでない者という差異が見られる。たとえ生物医学的知識を持ち合わせているとみなされている医者であろうと国家に由来する権力を持ち合わせている警察であろうと真耶穌教会の信者でなければそこに何ら危機の回避の能力がないとみなされているということであろう。また、A 氏の「医者でさえも奇妙であると言っている」や C 氏の「警察が来て調べてみると、私が全く怪我をしていないのを不思議に思

い」などのように彼らの側の理解（臨床リアリティ）から大きく離れてもいる。

前節では福因として神への接続を取り上げたが神と人とのつながりという意味においてはこれまでの聖霊観念と大差があるわけではない。しかし、本節で抜き出したとおり真耶穌教会の福因の言説には明らかに信者同士のつながりが見出される。彼らはこれまでの聖霊観念によって説明される神とのつながりだけでなく、信者同士のつながりをも重要視している。本教会の福因には単に聖霊の臨在による力だけでは解決できない部分があるといえよう。例えば聖霊が本人とともにあるのであれば、子供や未信者ならばまだしも自力で独力で祈るだけでもいいはずである。論理的には神の力は万能であるはずなので、その人が聖霊とともにあるのであれば一人で祈っても無限の力を発揮するはずである。しかし、彼らは信者同士で祈りあい、そのことによって力を発揮すると考えていると言説からみて取れる。これは明らかにスピリチュアリティとでも呼ばざるを得ないような信者同士のつながりの感覚であって、聖霊の臨在という聖霊観念と信者同士のつながりというスピリチュアリティの両者が混在、混交しあった状態こそが真耶穌教会における健康観に大きな影響を与えているのであろう。ここにおいて真耶穌教会における福因のスピリチュアリティが現出しているのである。

3. 民俗宗教的災因論からキリスト教的福因論へ

これまで福因に限定して分析を進めてきたが、上述の言説には災因を見出すことはできない。この原因をこれまでの漢人社会の民俗宗教研究に照らして分析する。渡邊欣雄はアメリカの人類学者の分類に基いて台湾の漢人社会の神観念を神、鬼、祖先に分け、神は求めに応じてプラスの力を与える存在、鬼魂は祀らないと人間にマイナスの力を加える存在、祖先は祀ればプラスの、祀らなければマイナスの力を与えると認識されているとしている【渡邊欣雄, 1991: 26-31】。しかし、一般的にキリスト教では神の力を強調し、鬼（悪霊）の力を認めないか神の前では無力に等しいと考えるために鬼の力が介在する災因を語ることは少なく、むしろ全知全能なる神の力を語るということができ、真耶穌教会においては福因のほうがより聞くことができると言えよう。つまり、漢人社会では有象無象の存在が官僚体制として表れる神観念【三尾, 1990】のもとにパンテオンに回収され、それらが人間世界に様々な影響を与えるとされているが、そのような存在を全知全能なる神に一元化して回収し鬼の与えるマイナスの力よりも働きを強化し、鬼をそのような強力な神の対極に存在するものとして否定しているのである。その結果、鬼の与えるマイナスの出来事は超自然的な説明体系から乖離して、神の与える福因にその説明体系を集中させているといえよう。

5. 結 論

以上、健康の原因としての福因論を真耶穌教会の信者の言説を分析することで考察してきた。本研究では聖霊（スピリット）とつながっていることだけでなく、信者同士がスピリチュアルにつながっているという感覚が、真耶穌教会の福因に重要な要素であることを明らかになった。ここでは聖霊という神にだけつながるのではなく、信者同士でつながりがあるという感覚が重要で、それは世界とつながり、その感覚が更に広がっていくということであろう。ただし、人なら誰でも良いというわけではない。つながるべきは信者同士、つまり、神とつながっている人との接続が求められている。ここに民俗的な世界観でも、民衆的キリスト教的世界観でもない、その両者の結節点としての独特な真耶穌教会での健康観とその福因論があったといえる。これまでの聖霊観念に由来するスピリットは聖書の神学的スピリチュアリティとでも呼び現すべきであろうが、後者は社会的スピリチュアリティであるといえるだ

ろう。これまでのキリスト教研究では前者に重点が置かれていたが、このような人と人のつながりに着目する社会的スピリチュアリティの考察を通じてより豊かな健康観を現代社会に提案できるのではないだろうか。

また、文化人類学とくに医療人類学に関しては健康観の研究を深く進めていくことが重要であるといえる。これまでの病い中心の研究では災因論を中心にすえざるをえないという限界があった。今後は健康の研究によって福因論という新たな視点を切り開くと同時に、災因論と福因論の両者の交渉や相互作用を考察することでより複雑で綿密な臨床リアリティが明らかになるであろう。

注

- 1) 現代社会におけるスピリチュアリティをめぐる状況を考える上でスピリチュアルデザイン研究所(所長 榎尾直樹)が主催するウェブサイト「スピリチュアルナビゲーター Spinavi」<http://www.spinavi.net/>(2005年5月現在)が参考になる。
- 2) 台湾ではカトリックを天主教, プロテスタント諸派を基督教と分類している。そこで本稿ではキリスト教と標記した場合にはカトリックとプロテスタント両者を合わせたもの, 基督教と標記した場合にはプロテスタントを指すこととする。
- 3) ちなみにこの数字は前掲書台湾研究所編集『台湾総覧(2001年版)』と大きく異なっている。おそらく調査法が異なったためと思われるが, 前者は各教会の状況を報告するために, 後者は台湾の宗教事情を報告するために用いた。
- 4) 真耶穌教会の歴史, 教義, 礼拝などに関しては藤野 2005 年を参照。
- 5) 真耶穌教会の教義は「新旧約聖書は, 神の靈感によって書かれ, 黙示された真理を証明する唯一の聖典であり, 信仰生活の基準であると信じる。(真イエス教会基本信仰信条)」に見られるように聖書主義に則っている。
- 6) 言説中の下線は後述の分析の部分で利用する。一本線は 4 節分析の 1「福因の言説」で, 二本線は 2 の「信者同士のつながりの中で」で抜き出す部分である。
- 7) 本事例は藤野 2005 年でも紹介したものであるが, 本研究の目的にとって好例であるために再掲する。
- 8) 本項で引用する聖書は日本の真耶穌教会である真イエス教会が利用している口語訳を利用する。
- 9) 一般にユダヤ教・キリスト教の神の名はヤーヴェと考えられているが, 真耶穌教会ではエホバは永遠不変自存であることを示しているだけで, 神の聖名ではないとされ, 「神は主に「イエス」以外の名を賜わず, 又主は「イエス」よりの名を弟子達に知らせなかった。故にイエスが, 御名をあらはしたとか, 我に賜ひたる汝の御名云々の御名は, エホバでなくイエスたる名を指してをすることは少しも疑ふ余地なく, イエスは神の御名であることは明らかである」とし, 真の神の名はイエスであるとする【日本真耶穌教会本部編, 1943: 65】。
- 10) 驚はその後天使(神)であると判明するために神に分類することとする。
- 11) 「神もしくはイエスの名」については「信じる者には, このようなるしが伴う。すなわち, 彼らはわたしの名で悪霊を追い出し, 新しい言葉を語り, へびをつかむであろう。また, 毒を飲んで, 決して害を受けない。病人に手をおけば, いやされる」。(マルコによる福音書 16 章 17-18 節), 「ペテロが言った, 「金銀はわたしには無い。しかし, わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。こう言って彼の右手を取って起してやると, 足と, くるぶしとが, 立ちどころに強くなって, 踊りあがって立ち, 歩き出した。そして, 歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら, 彼らと共に宮にはいって行った。(使徒行伝 3 章 6-8 節)」等。
「祈り」については「ペテロが皆を外に出し, ひざまずいて祈り, 遺体に向かって, 「タビタ, 起きなさい」と言うと, 彼女は目を開き, ペテロを見て起き上がった(使徒行伝 9 章 40 節)」等。
「信仰」については「さて, イエスがカペナウムに帰ってこられたとき, ある百卒長がみもとにきて訴えて言った, 「主よ, わたしの僕が中風でひどく苦しんで, 家に寝ています」。イエスは彼に, 「わたしが行ってなおしてあげよう」と言われた。そこで百卒長は答えて言った, 「主よ, わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は, わたしにはございません。ただ, お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。わたしも權威の下にある者ですが, わたしの下にも兵卒がいて, ひとりの者に『行け』と言えば行き, ほかの者に『こい』と言えばきますし, また, 僕に『これをせよ』と言えば, してくれるのです」。イエスはこれを聞いて非常に感心さ

れ、ついてきた人々に言われた、「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、この国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」。それからイエスは百卒長に「行け、あなたの信じたとおりになるように」と言われた。すると、ちょうどその時に、僕はいやされた。(マタイによる福音書 8 章 5-13 節)、「すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」と言って叫びつづけた。しかし、イエスはひと言もお答えにならなかった。そこで弟子たちがみもとにきて願って言った、「この女を追い払ってください。叫びながらついてきていますから」。するとイエスは答えて言われた、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。しかし、女は近寄りイエスを拝して言った、「主よ、わたしをお助けください」。イエスは答えて言われた、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。すると女は言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」。そこでイエスは答えて言われた、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」。その時に、娘はいやされた。(マタイによる福音書 15 章 22-28 節)」等。

- 12) A 氏の「多くの先輩(人・方々)」、「私を愛してくださっている方々」にはおそらく真耶穌教会の信者以外も含まれるであろうし、と B 氏の「父」は真耶穌教会の信者であり、C 氏の「同行した人」も信者であると思われる。

参考文献

- Dubos, R. J. 1959 *Mirage of Health: Utopias, Progress and Biological Change*. (田多井吉之介訳『健康という幻想』, 紀伊国屋書店, 1983).
- Evans-Pritchard, E. E. 1937 *Witchcraft, oracles and magic among the Azande*. Oxford at the Clarendon Press. (向井元子訳『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術—』みすず書房, 2001).
- 藤野陽平 2003 「台湾キリスト教における健康観に関する一考察—真耶穌教会を事例として—」(慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻修士論文).
- 2004 「台湾の地方祭祀にみる民俗的健康観—小琉球における王爺の迎王祭典の事例から—」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 58 号.
- 2005 「癒しの民俗宗教としての台湾キリスト教—真耶穌教会を事例として—」『日本台湾学会報』第 7 号.
- 池田光穂 2001 『実践の医療人類学—中央アメリカ・ヘルスケアにおける医療の地政学的展開—』世界思想社.
- 伊藤雅之・榎尾直樹・弓山達也編 2004 『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求—』世界思想社.
- 葛西賢太 2003 「スピリチュアリティ」を使う人々—普及の試みと標準化の試みをめぐって— 湯浅泰雄監修『スピリチュアリティの現在—宗教・倫理・心理の観点—』人文書院.
- 榎尾直樹編 2002 『スピリチュアリティを生きる—新しい絆を求めて—』せりか書房.
- 榎尾直樹 2004 「現代世界の絆—スピリチュアリティの諸相を描く—」池上良正他編『絆—共同性を問い直す—』(岩波講座 宗教〈第 6 巻〉) 岩波書店.
- 窪寺俊之 2000 『スピリチュアルケア入門』三輪書店.
- Kleinman Arthur, 1980 "Patients and Healers in the Context of Culture: An Exploration of the Borderland between Anthropology, Medicine, and Psychiatry." University of California Press. (大橋英寿, 遠山直哉, 作道信介, 川村邦光訳『臨床人類学』弘文堂, 1992).
- 三尾裕子 1990 「〈鬼〉から〈神〉へ—台湾漢人の王爺信仰について—」『民族学研究』55 巻 3 号.
- 長島信弘 1983 「ケニアのテソ社会における病い—占いからみた症状と病因を中心として—」『民族学研究』48 巻 3 号 (特集 シンポジウム: 病いのシンボリズム).
- 1987 『死と病いの民族誌: ケニア・テソ族の災因論』岩波書店.
- 波平恵美子 1994 『医療人類学入門』(朝日選書) 朝日新聞社.
- 日本真耶穌教会本部編 1943a 『真耶穌教会要論』日本真耶穌教会本部.
- 1943b 『真耶穌教会要論』台中市, 日本真耶穌教会本部.
- 野村一夫 2000 「健康の批判理論序説」佐藤純一・池田光穂・野村一夫・寺岡伸悟・佐藤哲彦著『健康論の誘惑』

文化書房博文社.

Porter Roy, 1987 *Health For Sale: Quackery in England 1660-1850*. Manchester University Press. (田中京子訳『健康売ります—イギリスのニセ医者の話 1660-1850—』みすず書房, 1993).

大谷栄一 2004 「スピリチュアリティ研究の最前線—二十世紀の宗教研究から二十一世紀の新しい宗教研究へ—」

伊藤雅之, 壺尾直樹, 弓山達也編『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求—』世界思想社.

『聖書 (口語訳)』日本聖書協会 1954.

台湾研究所編集 2001 『台湾総覧 (2001 年版)』通巻第 30 号, 台湾研究所.

渡辺公三 1983 「病いはいかに語られるか—二つの事例による—」『民族学研究』48 巻 3 号 (特集 シンポジウム: 病いのシンボリズム).

渡邊欣雄 1991 『漢民族の宗教—社会人類学的研究—』第一書房.

山口昌男 1990 『病いの宇宙誌』論風社.

義工, 朱三才主編 2004 『2003 台湾基督教会教勢報告』基督教資料中心.

吉田禎吾 1983 「バリ島民およびメキシコチアパス高地インディオの病気と治療儀礼」『民族学研究』48 巻 3 号 (特集 シンポジウム: 病いのシンボリズム).

湯浅泰雄監修 2003 『スピリチュアリティの現在—宗教・倫理・心理の観点—』人文書院.